



# 安積の歴史シリーズI



## 第10回 中世 郡山合戦と郡山城

柳田 和久 (やなぎだ かずひさ)

郡山市文化財保護審議会  
委員



### 伊達政宗の南下政策

天正12(1584)年、伊達輝宗の跡を継いだ政宗は南下政策を取り、佐竹・蘆名連合軍と敵対した。

同13年、伊達政宗は蘆名領である檜原を攻めて占領した。<sup>(1)</sup> ついで、同年閏8月には安達郡に兵を進め、蘆名方となった安達郡塩松(二本松市長折四本松)の大内定綱を攻め、定綱方の小手森城(二本松市針道)を攻撃し、男女800人を撫で斬り(皆殺し)にした。定綱は小浜城を捨て黒川(会津若松市)へ逃れた。<sup>(1)</sup>

小浜城(二本松市小浜字下館)に入った政宗は、定綱を支援した二本松城主畠山義継を攻める計画であった。義継は伊達輝宗の陣所である安達郡宮森城(二本松市小浜字上館)を訪れ講和を願い出た。輝宗は政宗に講和の内容を話し、5ヶ村を畠山家に宛てがうことにした。

10月8日、義継は講和を仲介した御礼のため宮森城へ出向いた。義継は会見を終えて玄関まで見送りに出た輝宗を捕らえ、7・8名ほどで取り囲みながら、二本松まで引上げようと阿武隈川の畔の高田原(二本松市沖)まで来た。伊達の家臣等も義継を追ったが手を出せずにいた。輝宗は家臣へ義継を撃ち殺せと叫んだ。政宗は家臣に命じ、

義継とともに輝宗も銃撃した。<sup>(2)</sup>

### 人取橋の合戦

政宗は父輝宗の仇を討つため二本松城を攻めた。二本松城を救援すべく佐竹義重が援軍に加わった。

天正13(1585)年11月10日ごろ義重は、蘆名・白川・岩城・石川等の連合軍3万を率い、岩瀬郡須賀川に兵を結集し、安積郡中村城(郡山市片平)を攻め、前田沢兵部を味方にし、本宮へ進軍してきた。佐竹・蘆名勢は兵を三手にわけ、一手は前田沢より五百川の関下を渡り高倉城(郡山市日和田町高倉)に進む隊、一手は荒井をへて上台(本宮市仁井田字枅形)に進む隊、一手は上台に



第1図 人取橋古戦場の碑

進む隊を援護して高倉勢と戦う隊である。

高倉城には、桑折治部・富塚近江・伊東肥前等が鉄砲隊300人を率いて待ちかまえた。伊達政宗は本宮の西太田原の観音堂を本陣とし、伊達成実は高倉から観音堂本宮への道筋の小山（榊形）に陣を構えた。

荒井から進んだ隊が本陣観音堂を攻め立てた。茂庭（鬼庭）良直は人取橋の近くまで追われ、なんとか10数騎が馬を返して戦ったが遂に戦死した。<sup>(3)</sup>

戦いは連合軍が優勢のうちに展開していたが、佐竹勢が早々に陣を引いた。佐竹氏の本領が江戸重通・里美義頼に侵略されたからとも、佐竹氏の軍師が家僕に刺殺されたからともいわれている。<sup>(4)</sup>

天正14（1586）年、政宗は二本松城を攻撃した。二本松城では幼主国王丸等が守備しており、相馬義胤が和睦の仲介に入った。和睦の条件は国王丸が二本松城を放棄することであった。7月16日に畠山方は二本松城を焼き、国王丸は会津に逃げ、二本松城は開城した。<sup>(5)</sup>

### 郡山合戦

天正16（1588）年7月、佐竹・蘆名連合軍と伊達政宗が郡山で合戦となった。郡山城（郡山市駅前陣屋）の陥落を計る連合軍と、郡山城を救援しようとする伊達軍の合戦である。郡山城主は郡山太郎右衛門頼祐（朝祐とも）である。

6月1日、佐竹義重が蘆名・白川・石川・二階堂等を従えて安積郡に出陣する風聞が伝わり、政宗は同月7日に一族を本宮に遣し、9日には白石右衛門・片倉小十郎を田村郡守山へ、浜田伊豆を安積方面に、富塚右近を木村へ、七宮伯耆を安久土へ遣し、佐竹・蘆名連合軍の進出に備えた。<sup>(6)</sup>

6月11日に佐竹・蘆名連合軍は安積に出陣し、小原田に本陣を構え、<sup>(7)</sup> 郡山城の西の高台に野も山も平に陣取った<sup>(8)</sup>（現在の金透小学校・善導寺辺り一帯）。

佐竹・蘆名勢は4,000騎とも8,000騎とも言われている。<sup>(9)</sup> これに対し、伊達勢は600騎と小勢で、数のうえでは圧倒的に佐竹・蘆名勢が勝っていた。伊達方は、北の大崎・最上、東の相馬と対陣中で

軍勢を割かれていたためである。<sup>(10)</sup>

政宗は宮森から本宮へ兵を進め、本陣を本宮に構え、久保田城に飯坂右近・大嶺式部、福原城に瀬上中務・高倉城に大條尾張を配した。<sup>(11)</sup>

佐竹・蘆名連合軍は、12日には阿久土（富田町阿久土）を攻撃し、13日には郡山城の西の高台に山を2つ要害のように築き、町を見下ろして鉄砲で攻撃した。このままでは、郡山城の落城は疑いない状況であった。<sup>(12)</sup>

政宗は郡山城に大町宮内・中村主馬・塩森六郎左衛門・小島右衛門の奉行と太宰金七郎、他に武者30余騎、鉄砲隊200人を送り込み防備を固めた。<sup>(12)</sup>

### 郡山城の孤立化を図る

14日と16日に、蘆名勢は久保田を攻撃した。久保田の前は田でぬかるみ、郡山城よりの援兵に背後から鉄砲を打ち懸けられ引き上げた。18日に佐竹・蘆名勢は山王山の西の山続から攻撃したが、山の上から鉄砲を撃ちかけられ引き上げた。<sup>(12)</sup>

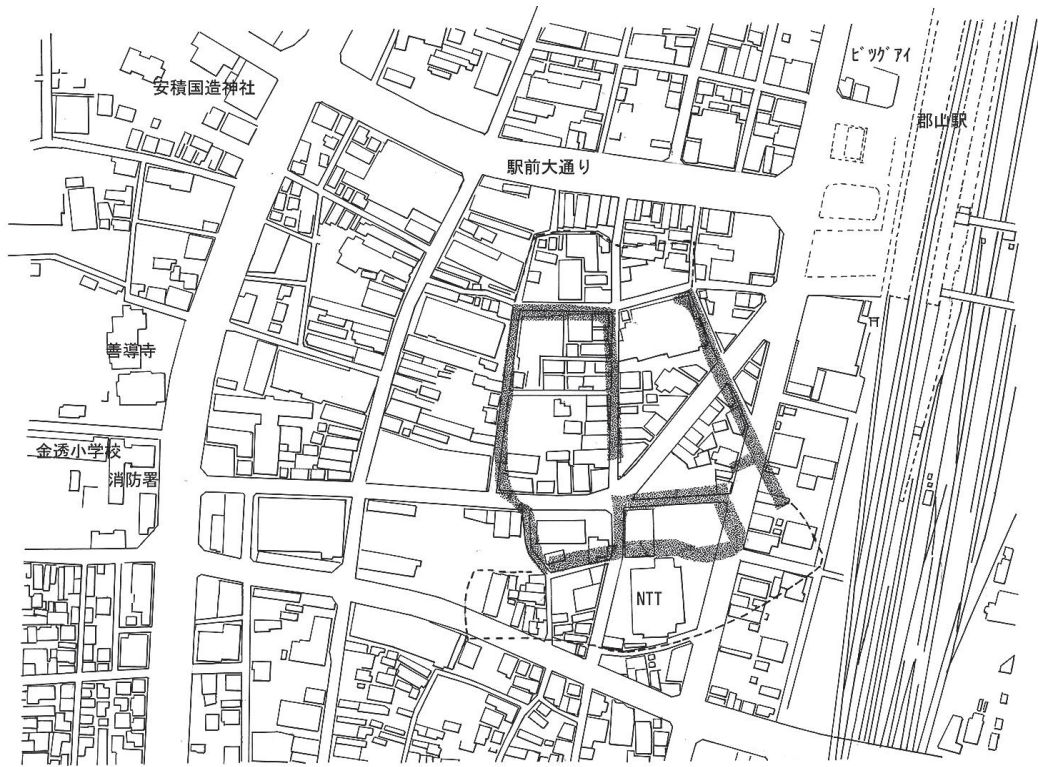
そのため、佐竹・蘆名勢は郡山城と伊達勢の分断を図った。佐竹・蘆名勢は、23日に郡山と久保田の間（逢瀬川の南側）に砦を築き、26日には23日に築いた砦の東に新たな砦を築いた。<sup>(12)</sup> 佐竹・蘆名勢は砦を2つ築き、郡山城と伊達勢を分断し郡山城の孤立を図ったのである。

これに対し、伊達勢も逢瀬川を外堀にみたく、その内側に堀を掘り、土塁を積み、砦を築き孤立するのを阻止した。<sup>(12)</sup> さらに、政宗は郡山城に連日連夜、玉薬や兵糧を送って励ました。<sup>(12)</sup>

7月4日、久保田の砦の番は伊達成実と片倉小十郎であった。砦では成実と小十郎が番なので必ず戦になるだろうと用意していた。

佐竹・蘆名方の長沼城代新国貞通が戦をしかけてきた。貞通は武者5・6騎、兵士100人を率いて、佐竹勢が26日に築いた砦と、伊達勢が築いた久保田の砦の間を通過した。久保田の砦から伊達勢が出て貞通を追った。佐竹・蘆名勢も砦から兵が出て合戦となった。<sup>(12)</sup>

政宗・伊藤肥前が本陣より駆けつけ、戦を止めさせようとしたが、政宗は旗本等に制止された。



第2図 郡山城の所在地 は堀跡

肥前は馬で乗り入れ敵味方を振り分け、馬を返したところ敵の鎗で突かれ戦死した。

戦は午前8時頃から始まり、午後2時頃まで続いた。佐竹・蘆名勢は200余人、伊達勢は50余人が戦死した。<sup>(13)</sup>

### 和解の条件

合戦は、岩城常隆<sup>いわきつねたか</sup>・石川昭光<sup>あきみつ</sup>の調停で和睦した。和睦の条件を記載しているものに「内覚」と「覚」がある。

「内覚」は岩城の重臣甘釣斎玄湖<sup>かんちょうさいげんこ</sup>と伊達の間で合意したものである。この「内覚」は郡山の地（郡山城）は伊達方に付られ、大越の城主大越紀伊守顕光<sup>いのかみあきみつ</sup>を当方（岩城）へ渡すが、その進退（立場・財産）については政宗の処置に委ねるというものである。また、「覚」には、前田沢・部谷田（日和田）を伊達へ付け、富田・成田を会津へ付ける。7月13日以後の取り扱いは、和睦した条件のほかには何もないと記載されている。すなわち、内覚に記載されている郡山城を伊達方へ付すことを、佐竹・蘆名方が了承したのである。<sup>(14)</sup>

### 註

- (1) 『郡山市史』 1
- (2) 『政宗記』（小林清治校注『伊達史料集』（上）所収、『郡山市史』 1
- (3) 註 1
- (4) 註 1
- (5) 註 1
- (6) 『貞山公治家記録』平重道編集『仙台藩史料大成 伊達治家記録』
- (7) 「佐竹義重書状」（千秋文庫所蔵『佐竹古文書』所収）
- (8) 『奥陽仙道表鑑』（『岩盤史料叢書』（上）所収）
- (9) 『貞山公治家記録』『伊達日記』『奥陽仙道表鑑』は4,000騎、『政宗記』は8,000騎とする
- (10) 註 1
- (11) 『貞山公治家記録』『伊達日記』
- (12) 註 6
- (13) 註 2
- (14) 高橋明「郡山合戦について－猪苗代盛種書状等3文書を読み解く－」『郡山地方史研究』第38集